
M I A

MACMAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M I A

【Nコード】

N 4 4 6 8 F

【作者名】

M A C M A N

【あらすじ】

第二次大戦終結後、英軍のある小隊は故郷への帰路につこうとしていた。しかし、突如現れた光によって彼らは全く未知の世界へと飛ばされてしまう。決して記録に残ることが無いであろう、彼らの戦いが始まるうとしていた。

遠すぎた帰路（前書き）

これは平賀才人がルイズに召喚されるよりも60年ほど前の話です。

遠すぎた帰路

1945年11月20日 フランス とある田舎町の英国陸軍の駐屯地

長く続くかと思われた二度目の世界大戦がようやく終結し、英国陸軍のジョナサン・カーク中尉の率いる小隊16名は、祖国への帰路に着くため、もはや不要となった駐屯地を撤去していた。

「ようやく帰国か・・・、考えてみれば短い戦争だったな・・・」
結局使うことのなかった弾薬の入った箱をトラックに運び込みながらトニー二等兵は言った。ジェシー二等兵も発炎筒などが入った木箱を載せながら言った。

「まあ、俺たちは激戦というほどの戦闘を経験したわけじゃないかな・・・、それより国に帰ったらまず何するんだ？」

「故郷に戻ったら、慰労金でバイクを買って好きなだけ乗り回すんだ！」

「おれは帰ったら結婚する予定だ！」

「ほー！！良かったじゃないかアルバート、これで好きなだけ彼女とヤれるからな！羨ましいぜ！」

「からかうなよトニー！！」

「お？むきになったかこの童貞め！」

「言っただけ！」

「なあベン、お前は どうするんだ？」

トニーは医薬品を整理していた衛生兵のベンに尋ねた。

「僕は大学に復学するつもりだ」

「お前学生だったのか、羨ましいな、何を学んでたんだ？」

「考古学だよ、特にエジプトとか・・・」

「そりゃ楽しそうだな・・・」

兵士達は帰国できる喜びで一杯であった。

ニールソン上等兵は立てかけてあったエンフィールドNO4小銃を手にとった。自動小銃が普及し始めているこの時代では、徐々に旧式化してきているボルトアクション（手動装填）式の小銃である。所々に傷が目立つが、それでも未だそれは武器としての威厳を保っている。

「国に変えれば、こいつもお蔵入りか・・・」

戦争が終わった以上、おそらくしばらくの間は役目はないだろう。しかし、長い間自分達とともに激戦を潜り抜けてきた相棒である。長く使ってきた分、それに対する愛着も強いものであった。

「今までよくがんばってくれたもんだ、我が相棒・・・」

「ま、こいつらのできることは殺しぐらいだからな、あとはハンティングにでも使う程度か・・・」

全ての荷物を積み終わり、小隊全員がトラックに乗り込んだ。三年ほど暮らしたこの村ともいよいよお別れだ。

「よし、出発だ！！」

小隊を乗せたトラックはゆっくりと動き出し

「さらば、フランス！！いざ、わが故郷へ！！」

英兵たちはヘルメットを外し、長い間暮らしてきた村に向けて手を振った。村に住んでいた人々も手を振って見送ってくれた。

「辛いこともあったが、あの村での三年間は楽しかったよ」

「とても平和で良い村でした・・・」

「何年かしたら、また行ってみたいものだ、今度は旅行者として・・・」

彼らの視界からどんどん村は小さくなっていった。

「中尉、さつきから気になっていることがあるんですが・・・」

「どうした、ベン？」

「空が・・・、どうも変です・・・」

「空？」

ジオナサンが空を見上げてみると、さっきまで雲ひとつない快晴だった空が、薄暗く曇っていた。

「気のせいだろうか？」

「そうだいいんですが・・・」

そのときだった、トラックの周りにまばゆい光が輝いた。

「なんだ!？」

「砲撃か!！」

一瞬でジオナサンたちの視界が白一色に支配された。

「く・・・ん？」

視界が徐々に戻っていく。

「落雷だったのか・・・？」

ジオナサンは隣で気を失っていたエヴァンズ軍曹を揺さぶった。

「エヴァンズ、エヴァンズ!おい、起きろ!！」

エヴァンズが目を開けた。

「中尉!！さっきのは？」

「私にもわからない」

エヴァンズは辺りを見回した。そして自分の目を疑った。

「ここは・・・砂漠？」

自分達はさっきまで森林を移動していたはずであった。しかし今、彼らの目の前にあったのは無限に広がるかと思われるような砂漠であった。さらにいつのまにか彼らの背後には巨大な石造りの遺跡があった。その形はギリシャやローマなどによく見られる形状のものであり、遺跡の中央部には崩れかけた巨大な石像が立っている。

「一体どうなっている？」

「自分にもわかりませんよ、我々は瞬間移動でもしたんですかい？」

「ありえない・・・」

しばらくして、気絶していた英兵たちが目を覚ましていった。

「くそ、なにがおこったんだ？」

「畜生、目がいてえ・・・、さっきすげえまぶしい光を見なかった

か？」

「みんな無事か！？」

ジヨナサンが彼らに声をかけた。

「全員大丈夫です！！」

「そうか、よかったよ・・・」

ジヨナサンはほっと胸をなでおろした。部下達も辺りを見回して、今の自分達の置かれている状況に驚いた。

「中尉！なぜ我々は砂漠にいるんです！？」

「まだフランスを出てなかったのに！」

「私にもわからない！なぜこんなところに我々がいるのかは・・・」
先ほどまでフランスに居たというのに、急にこのような砂漠に小隊が一瞬で移動してしまうなど、信じられない話である。

「とにかく、付近の安全を確保するのが先だ。四手に別れて遺跡の周辺に危険がないか調べよう。エヴァンズとベンは私についてこい」
小隊は一時的に四手に分かれ、それぞれ遺跡内を散策することになった。

「やれやれ、こんな所で遺跡探索とは・・・」

エヴァンズ軍曹はうんざりした様に言った。

「ベン、お前は遺跡に詳しくったな・・・」

「ええ、自分は大学で考古学を専攻していましたが、でもこんな遺跡は聞いたことがありませんよ。どうもおかしいんです」

「一体何がおかしいのか、我々にも判りやすいように教えてくれな
いか？」

「なんというか、所々に刻まれている文字が明らかに変です」

「どんな風にだ？」

「ここを見てください」

ベンは遺跡の一角を指差した。なにやら文字が書かれている。

「古代の文字はわからんよ・・・」

「象形文字やくさび形文字には見えないな・・・」

「信じられないんですが、これは恐らくルーン文字です」

「ルーン？」

「一世紀ごろ、ゲルマン語の表記に用いられたと言われている文字のことです」

ベンはジョナサンたちにもわかりやすいように、ルーン文字に関することを詳しく説明した。

「魔術師が使う字とやはこれはのことなのか・・・」

「ベン、この文字の解読は出来ないのか？」

「文字自体は判りますが、何が書いてあるのかはさっぱりです。これがこの言葉であるのか検討も着きませんよ。第一、この遺跡は見たところ少なくとも3000年ほどは前のものですが、刻まれているのがルーン文字なのは明らかにおかしいです」

「まったく、頭が痛くなってくるよ・・・」

「やれやれ、もっと勉強しておけばよかったな・・・」

「お二人とも高校を中退していると聞きましたか・・・」

「それ、言うな」

ジョナサンとエヴァンズは悔しそうに口調をそろえて言った。

結局、大したことが判らないうちに日が暮れようとしていた。この日に判明した良い事といえば、この遺跡周辺はオアシスであるので当分水に困ることはないと言う事くらいであった。

辺りが薄暗くなり始めたので、二時間交代で3人ずつ歩哨に立たせることにした。今はニールソンとニック、そしてメイソンが小銃を持って巡回している。他の者たちはさっさと毛布に包まってしまった。

エヴァンズとジョナサンは遺跡の中の小部屋にいた。

しばらくするとベンがカップを持って入って来た。

「中尉、コーヒーです」

「ありがとう」

「軍曹もどうぞ」

「砂糖は抜いたか？」

「ええ、もちろん」

「ならいいだろう」

出て行こうとしたベンにジョナサンは声をかける。

「ベン、皆に伝えておいてくれ、各自、絶対に武器を肌身離さず手元に置いておくようにと・・・、弾の装填も忘れるな」

「了解しました」

「それとベン、お前もだ」

ジョナサンは余っていた小銃をベンに放った。

「中尉、自分は銃を扱うのは・・・」

「いいからもっておくんだ、これから何が起こるかわからないからな・・・」

そう言つて予備の弾帯も放る。

ベンは渋々うなずくと部屋から出て行つた。

ジョナサンは隣で分解した小銃のボルトを磨いているエヴァンズ軍曹に声をかけた。

「軍曹、君の見解を聞かせてくれないか？」

「中尉にわからないことは私にもわかりませんよ、たとえ私が科学者だったとしてもね、それくらい異常な事態です」

「私が聞きたいのは今後どうするかだ・・・」

「幸いここはオアシスであるおかげでしばらく水には困らないでしょう、しかし食料はそんなに持たない、中尉、私は移動すべきだと思います」

「地図もないのにどうやって移動する気だ？当てもなくさまよつていればいずれ手持ちの水が尽きて小隊全員が干からびることになる・・・」

「ここにいっても助けがくるとは思えません。飢え死にするだけです。星の位置を当てにして移動すればいつかは人のいる集落に着けるかもしれないでしょう」

「そんな保障があるとは思えない、一体どうすれば・・・」

ジョナサンが頭を抱えた、そのときだった。

「中尉！！軍曹！！すぐに来てください！！」

外で歩哨に立っていたニールソンが大声で叫んだ。

「なんだ！？」

ジョナサンは短機関銃を抱えて建物の外に飛び出した。毛布に包まって寝ていた兵士達も飛び起きて、ニールソンの下に集まってくる。

「ニールソン！！どうした！？」

「あれを見てください！！」

ニールソンが空を指差しす。

その先にあるものを見たジョナサン達は息を呑んだ。

「嘘だろう・・・」

「これは何かの間違いだ・・・」

英兵達の視線の先にあったのは、満天の星が広がる美しい夜空だった。しかし、その夜空は彼らが今まで見てきたものとはまったく異なるものがあつた。

なぜなら、そこには二つの月が並んで輝いていたからだ。

「どうして・・・月が二つに・・・」

「どうなっているんだ！？」

「畜生、ここはどこなんだよ！？」

彼らの叫びが砂漠の夜空にむなしく響いていった。

遭遇

聖地、そこはかつて始祖ブリミルが降臨した土地といわれ、ハルケギニアに住む人々にとっても神聖な場所であった。しかし、その地を廻って太古よりハルケギニアの人々は、砂漠に住む種族であるエルフ族と激しい抗争を繰り返してきた。今では聖地の周辺はエルフ達によって実質的に支配され、人間が立ち入ることは無くなっていた。

砂漠の中を、200人ほどの男達が馬に乗って移動している。彼らは立派なサーコートに身を包み、腰には立派な装飾が施された剣を携えている。

彼らはハルケギニアの宗教国家ロマリア皇国教皇聖エイジス28世が派遣した密偵集団であった。

彼らの乗った馬はただの馬ではなかった。その馬の背中からは、白い羽が生えているのである。その馬はロマリア地方に生息する神聖な馬といわれている、ペガサスであった。このペガサスは空を飛べるのだが、照りつける太陽の中で空を飛ぶと体力の消耗が早いため、地面を歩かせていたのである。

「まったく、これほどの大人数ではもはや密偵と呼べるものではない、教皇聖下もなぜこれほどの人員を回されたのか、理解に苦しむな・・・」

先頭を進む騎士の一人が不満を漏らす。彼はアリエステ修道会聖堂騎士隊隊長、ゲリア・クリステイアーノ・トロンボンティーノ。後に、同修道会聖堂騎士隊隊長となるカルロ・クリステイアーノ・トロンボンティーノの祖父に当たる人物である。

「ゲリア殿、先ほど斥候に出した二名はまだ戻らんですかね？」
ゲリアとは旧知の中であるキーンが彼に尋ねる。

「ええ、まだです」

「そうですか、そろそろもどってきてても良い頃なのですが・・・」

「あまり二人だけでうるつかせるわけには参りませぬ、エルフどもに見つかるゝ厄介ですからな・・・」

「それにしても、『場違いな工芸品』を探すのは大変な苦勞を要するものですな」

「それだけの危険を起こしても手に入れる価値があるのですよ。」

「キーン殿、貴殿も2年前に見つかったと言ふあの鉄の箱を見たはずでしょう。」

「おお、あれの事ですか。奇妙なカラクリに大砲を乗つけたという、なぞの工芸品・・・、始めてみたときはあれの迫力に圧倒させられたものですよ。あのような『工芸品』、恐らくエルフ達であっても作れますまい、一体どこの誰が作り上げたものなのでしょうかな・・・」

「私もそれを知りたいものだ・・・」

彼らが『サハラ』を探索している目的は、『聖地』周辺で多数発見されると言われる『場違いな工芸品』を探し出し、それをロマリアに持ち帰ることであった。

「いやしかし、何度もこんな事をしていると、いつしか楽しくなってくるものですな」

最初の頃は、教皇の命令とはいえ、彼らはこの仕事を内心では嫌がっていた。誇り高い聖堂騎士隊員である自分達が、なぜこのような仕事をしなくてはならないのかと不満に思っていたくらいだ。しかし、様々な発見と出会えたおかげで徐々にこの仕事にやりがいを見出すようになってきたのだ。

「さて、今度はどのような『工芸品』を見つけるのか、たのしみですな・・・」

ゲリア達は馬を進めていった。

照りつく太陽の光を避けるため、英兵達は日中は皆、遺跡の陰でじつとしていた。しかなかった。やることと言えば、バラの弾丸を五発ずつ装填クリップにはめる事くらいだった。

「おれ達、国に帰れるのかな？」

装填クリップに弾丸を詰めながらジェシーは言った。

「さあな」

トニーはタバコを吹かしながら遺跡の壁に寄りかかった。

「ようやく、今年のクリスマスまでに帰れると思ってたのに、何でこんなことになるんだよ・・・」

「今年もケーキとシャンパンのないクリスマスか・・・、それもこんな砂漠では、ツイてねえな・・・」

ジェシーは懷から恋人の写真を取り出した。

「ミシエルは今どうしてるんだろうか・・・」

「さあな、新しい男でもさがしたんじゃないかねえのか・・・」

「なんだと？」

「今頃ベッドの上で新しい男と楽しんでもるかもな、案外そのほうが幸せだったりしてな・・・」

その言葉を聞いた瞬間、ジェシーは頭に血が上るのを感じた。

「トニー！！てめえ！！何てこと言いやがる！！」

ジェシーがトニーにつかみかかった。

「ふざけるな！！」

「ずっと女の話ばかりしやがって！！この童貞が！！」

「野郎！！」

「昨日から『ミシエルが、ミシエルが』って何度も何度も言いやがって、こっちはもうウンザリなんだよ！！おれだってたったひとり故郷で待つてるお袋の元に帰ってやりたいんだよ！！」

トニーはジェシーの手を振り解くと、彼の顔面を殴った。顔面を殴られたジェシーは後ろに吹っ飛ばされる。

「なにやってんだおい！！トニーよすんだ！！ジェシーもやめろ！！」

ベンがトニーを後ろから押さえつけた。トニーはベンを睨み付ける。
「ベン、てめえはすつこんでろ！！このインテリ野郎が！！」

トニーはベンの手を振り解くと、振り向きざまにベンの顔面を力い
っぱい殴った。殴られたベンは後方にすつ飛ばされる。

ジェシーがトニーに再び突っ込んできた。

「このおー！！」

「ちくしょお・・・！！」

再び取っ組み合いが始まった。二人とも歯をむき出しにしてお互い
の髪を掴み合っている。

「畜生、ありや長続きしそうだ・・・」

「夜まで続く方に、俺はシガー二本賭けるぜ・・・、二本だけだ、
貴重だからな・・・」

他の英兵たちも固唾を飲んでその様子を見守るしかなかった。

「二人とも・・・よせ・・・」

殴られ、意識が朦朧としながらも、ベンは二人に必死に呼びかけよ
うとした。

そのときだった。遺跡に一発の銃声が響いた。

「二人とも、いい加減にしろ！！」

二人が声のした方向を向くと、ジョナサンが立っていた。彼は小銃
を空に向け撃ったのだ。

「中尉・・・」

「トニー、ジェシー、うんざりしているのはお前たちだけじゃない。
お前たちを止めに入ってくれたベンも、他の連中も、みんなうんざ
りしている！！だが必死に耐えてるんだ！！」

ジョナサンは二人を睨みつけながら言った。

「つまらない揉め事は結果的に小隊全体の統制を乱すことになる！
！無意味な争いは死期を早めるだけだ！！小隊の統制を乱すような
真似は許さん！！」

そっとうとジョナサンはベンの方に向かっていき、彼に手を差し出
した。

「ベン、大丈夫か？」

「ええ、なんとか・・・、すみません、中尉・・・」

ジョナサンの手を借りながらベンは立ち上がった。

「気にするな、よく二人を止めに入ってくれた、エヴァンズ、手当てしてやってくれ」

「了解しました」

「いえ、これくらい自分で何とか出来ますよ」

ベンは血を拭いながらも笑顔で言った。

「そうか、わかった・・・」

ジョナサンはベンにハンカチを渡して言った。

「さあ、これで顔を拭くといい、せつかくのハンサム顔が台無しだぞ？」

ベンはそれを受け取る。

「感謝します、中尉」

「ベン、私はお前が小隊にいて本当に良かったと思う。お前は本当にいい奴だ、お世辞は一切ぬきでだ・・・」

ジョナサンはベンの肩をたたきながらそう言った

「中尉も、どうかあまり気を病まないでください・・・」

ベンは多少ふらつきながらも、医療キットが置いてある遺跡の中へ向かっていった。

「こんなことに貴重な弾薬を使いたくはなかったよ・・・、今は一発でも大事にしなくてはならないのに・・・」

「二度となければいいのですが・・・」

ジョナサンは小銃をエヴァンズに返した。

砂漠の空を二頭のペガサスが羽根を広げ飛んでいる。ロマリアの密偵団が放った斥候であった。彼らは万が一エルフに見つかったときにすばやく離脱する必要があるため、特別に空を飛ぶことが許可されている。

彼らの前に巨大な遺跡が現れた。

「あれは、テーレの神殿か、数多く存在すると言われる始祖ブリミル縁の地の一つ……」

「始祖ブリミルのお力によって生み出されたというオアシスに建てられたという神殿か……、噂には聞いていたが始めて見るな……」

「始祖の生み出した奇跡はすばらしい、あのオアシスは6000年以上存在しているのだ……」

エルフに聖地を奪われて以降、かつて美しかったであろう神殿は、いまや無残な廃墟と化していた。

「無残なものだ、始祖はさぞかし嘆くに違いない」

彼らは神殿のすぐ上を通過しようとした。

そのときだった。不意に彼らの乗ったペガサスが警戒しだしたのだ。

「なんだ！？どうした！？」

彼は遺跡の下を見た。そして自分の目を疑った。

「なぜ……、人がこんなところに！？」

そこには十数名ほどの男達がいたのだ。

「これは一体どういうことだ？我々のほかに『聖地』周辺に人間がいたとは……」

エルフ達に聖地を奪われてから、今やこの地に立ち寄るものは自分達のようなロマリアの密偵くらいなものである。それなのになぜ既に人間がいるのだろうか。

遺跡にいる男達が自分に気づいたようだ。彼らは驚いたような顔でペガサスに乗っている自分達を見上げている。

「彼らは何者だ？」

彼の同僚も下の連中に気づいたようだ。

「わからない、だが降りてみよう、接触してみる！！」

「なんだあの馬！？空を飛んでるぞ！？」

「あれはまるでペガサスだ!!」

英兵たちは突如として現れた空飛ぶ白馬に、驚きを隠せなかった。無理もない、空を飛ぶ馬など存在するわけがないと信じていたからだ。

「おい！奴らが降りてくるぞ!!」

ジェシーが指を差して叫ぶ。みるとペガサスがゆっくりと降下してきている。

「我々に興味を持ったようだ・・・」

彼らの100メートルほど前方に二頭の馬が着地した。

「これは行くしかなさそうだ・・・」

ジョナサンはそれに向かっていこうとした。

「中尉！？いったい何を？」

「奴らと接触を試みてみる、お前たちは待機している」

「中尉!？」

「奴ならきつとこのあたりに詳しいかもしれない、ここを脱出できるかもしれない!!」

「中尉!!危険です!!罠かもしれない!!」

トニーがジョナサンを引きとめようとする。

「大丈夫だ!!奴は銃を持っていないし、周りに仲間が潜んでいるような気配もない。」

「しかし・・・」

「これが最初で最後のチャンスかも知れないんだぞ？もう一か八かに賭けてみるしかないだろう!!エヴァンズ!!」

「は、はい中尉!!」

「もしものことがあったら・・・、お前に小隊を任せる!!いいか!？」

「中尉・・・、そんなことが決してないよう、祈っております!!」

ジョナサンはゆっくり男達に近づいていった。

男たちの目の前にたどり着くと、ジョナサンは彼らに向け話しかけた。

「お前たちはこのあたりに住んでいる者なのか？」

「Who e r j o ! !」

男のほうも何か言葉を発したようだが、ジョナサンには彼が何を言っているのが理解できなかった。

「なんだ？何を言ってるんだ？」

よく見ると馬に乗った男たちは派手な服を着ている。まるで中世あたりの十字軍騎士のような格好であった。腰には剣を下げている。一体彼らは何者なのだろうか？

「Who e r j o ! ! U n t W h a r e r j o k o m e n ! !」

「くそ、まったく言葉がわからない、こいつらは一体どこの国の人間なんだ・・・」

「何度も言わせるな！お前たちは何者だ！？なぜここにいる！？」
ロマリア兵は目の前の男になんども話しかけた。しかし男はまったく理解していないようである。

「ここはテーレの神殿だ！！お前たちは神聖なる地を穢したのだぞ！？聞こえないのか！？それとも言葉がわからないのか？」

一緒にいた彼の同僚が言った。

「見たところ、こいつらは東方の者たちではないようだぞ、妙な格好をしているな。」

たしかに神殿にいるこの男達の格好は妙だった。ほぼ全員が皿型の鉄兜を被り、土色の服を着ている。杖を持っていないためメイジではないようだ。代わりに全員が銃のようなものを持っている。しかしそれは、今のハルケギニアで一般的な火縄銃やマスケット銃とくらべて様々な部分が異なっている。服装が統制されているところを見ると、おそらくどこかの国の軍隊であるのだろう。しかし、このような服装の軍隊など見たことも聞いたこともない。

「では何者だと言うのだ？」

無駄だとは思ったのだが、ロマリア兵は目の前にいる男にもう一度尋ねることにした。ゆつくりとした口調で話しかける。

「もう一度聞こう、お前たちは何者だ？そしてどこから来たんだ？」
それでも男は首を傾げるだけであった。

「ぬう、どうすればいいのだ・・・」

そのときだった。突然、乾いた音が辺りに響いた。

「なんだ!？」

次の瞬間、彼の腕に激痛が走った。

「今の音は!？」

ジョナサンが音のした方向を向くと、トニーが小銃を構えて立っていた。

「まさか!！」

再び男の方を見ると男は片腕を抑えていた。その腕からはおびただしい血が流れている。

「そんな!！」

「r a n n u n ! !」

男は何かを叫ぶと、馬を振り向かせ、一気に走り出した。もう一人のほうもあとに続く。

「おいまて!!おい!!」

男達はどんどんジョナサン達から遠ざかっていく。

トニーは男がまだ生きているのを確認した。

「チクシヨー!!外したか!!」

トニーはボルトを操作して次弾を装填すると再び男に狙いを定める。それを見たジョナサンが大声で叫んだ。

「トニー!!撃つなああああ!!」

ジョナサンの叫び声が耳に入っているにもかかわらず、トニーは再

び引き金を引いた。しかし、今度は走っている馬の近くに着弾しただけだった。

「畜生！！逃がすかよ！！」

再びボルトを操作し、狙いを定めようとした瞬間、彼の顔面に強烈な拳が入る。トニーはその場から吹っ飛ばされた。彼の目の前にジョナサンが立っていた。

ジョナサンはトニーを立たせると、胸倉をつかんで壁に押し付けた。

「トニー！！なぜ奴を撃った！？」

「奴は武器を持っていました！」

反省するそぶりもなく、トニーはそう言った。

「まだ剣を抜いていなかったぞ！！」

「そんなことは関係ないです！！どう見ても奴は味方には見えなかった！！」

「攻撃する意思の無い者を撃つたんだぞ！お前は！！」

「中尉！！羽の生えた馬に乗ってるような奴を信用できますか！？奴は絶対ナチ野郎の残党です！！あの馬も、ナチ野郎のやばい実験で生まれた生物に決まってる！！」

「だからと言って私の命令に背くのか！？貴様！！」

ジョナサンは男が去っていった方向を指差した。

「見る！奴らはもう行ってしまった！！ここを脱出できる最後の手掛かりだったのかもしれないのに！！それがお前一人の勝手な行動のせいで逃してしまった！！」

トニーを押さえつけている手に力がこもる。

「ぐ・・・」

「トニー！！もう二度とバカな真似はするな！！今度やったらただではすません！！」

そう言つてトニーを乱暴に突き放すと、ジョナサンは遺跡の中に戻っていった。その後姿を睨みつけながらトニーはつぶやいた。

「イエス、サー・・・」

結局脱出する手立てを失ったまま、二日目の夜を迎えようとしてい

た。

対峙

夜も近くなってきたので、ロマリアの密偵団は砂漠の中のオアシスに陣を張ることにした。テーレ神殿もここから馬で2時間もあれば行ける位置であった。

「斥候に出した二人はまだ戻らんのか？」

イライラした様子でゲリアは部下に尋ねる。

「いまだ戻っていないようです」

「まさか、エルフどもに見つかったのではあるまいな？」

彼の不安はますます募る一方であった。だがそのとき見張りの兵士が大声を上げた。

「戻ってきたぞー!!」

「なんだと!？」

ゲリアたちは天幕の外に飛び出した。みると、テーレ神殿に向かわせた二人がこちらに向け馬を走らせているところであった。

「おお、無事であったか!!」

「これでひとまず安心ですな・・・、ゲリアどの・・・」

ゲリアはほつと胸をなでおろした。しかし、斥候が陣のすぐ前まで来たとき、彼は様子がおかしいことに気づいた。一人の腕には包帯が巻かれていたのだ。そう、トニーが撃ったロマリア兵である。

「どうした!? 何があったというのだ!？」

「おお、ゲリア様! 大変です!!」

彼はゲリアにテーレ神殿で起こったことの全てを話した。誰もいないと思っていた神殿には謎の集団が居座っていたこと、接触を試みたがまったく言葉が通じなかったこと、不意に銃のようなもので撃たれたため、あわてて逃げてきたということ・・・。

「ゲリア様、申し訳ありませんね!! 浮浪者どもを追い払うどころか、返り討ちにあってしまいました。」

負傷したロマリア兵はゲリアに深く頭を下げた。

「いや、気にするのではない・・・、それより早く手当てをしてもらうがよい」

「ありがたきお言葉です」

負傷したロマリア兵は、治療担当のメイジがいる天幕へ向かって行った。

「ゲリア殿、今の話どう思いますかな？」

隣にいたキーンがたずねた。

「非常に気になりますな、テーレの神殿に現れたと言う謎の集団」

「しかし、メイジではない、というのか・・・」

「さて、どうされますかな？」

ゲリアはしばらく考えていたが、意を決して言った。

「夜が明き次第、テーレの神殿へ向かおう!!」

この砂漠に来てから、3日目の朝を迎えた。

特にすることもなく、英兵たちは銃の手入れをしていた。

「今日で三日目か・・・」

「シガーもおしまい」

そう言つてトニーは最後のシガーに火をつけた。

「やれやれ、神様つてのはどうしてこうもふざけたマネをしてくれるんだか・・・」

「本当に呆れるよ」

「結局神様なんて、いないのかもな・・・」

「カミサマなんてのはなあ、人間を守護するなんて虫のいいことはしちゃくれないんだよ、カミサマのやることは空からバカどもがくたばるのを面白がつて観察することだけさ。結局、自分たちの力で生き残るしかないって事だ・・・」

トニーはそれだけ言つと、吸い終わつた最後のシガーを放り投げた。そのときだった。

「中尉!!! 大変です!!!」

遺跡の高台から遺跡周囲を見張っていたニールソンが大声で怒鳴った。

「なんだ!？」

ジョナサンは遺跡をよじ登り、ニールソンの近くまで来た。そして彼から双眼鏡を借りて覗いた。その先には馬に乗った200名ほどの人間が遺跡へと迫っているところであった。その集団は皆白いサーコートを纏っている。間違いなく昨日の二人の仲間だ。

「昨日の二人のお仲間を怒らせたようだな・・・」

ジョナサンはニールソンに向かって言った。

「ニールソン! 全員に持ち場につくよう伝える!」

謎の集団の接近を知らされた英兵たちは慌てふためいていた。

「昨日現れた連中の仲間に違いはない!!」

「くそ、昨日の報復に来やがったのか!!」

英兵たちは小銃を取り、あらかじめ決めておいた戦闘配置に着く。

「指示するまで絶対に発砲はするな!!」

ジョナサンは部下達に向かって叫んだ。

「畜生、あの時二人とも確実に殺しておくべきだった!!」

クリップに纏められた弾丸を弾倉に押し込みながら、トニーは遺跡の外にいる集団を睨みつける。

「こうなったら皆ぶっ殺してやる!! 来るなら来やがれてんだ!!」

「全部お前のせいなんだぞ!! トニー!! 少しは自分のやったことを反省しろ!!」

半ば呆れたようにベンがトニーにそう言った。

「俺はなあ!! 今すんごくイラついてんだ!! 誰かクソツタレをぶっ殺さなきゃ気がすまねえんだよ!!」

トニーは怒鳴り散らすようにそう言い返した。ジョナサンはトニーに言った。

「トニー、やつらの目的が報復か交渉かはまだわからないんだ、私がいいと言うまで絶対に引き金から指を離しておけ！」

トニーはやる気のないような声で答えた。

「イエス、サー」

遺跡まであと200メートルほどの位置に来たとき、ゲリアは片手を挙げた。

「全員そこで止まれ！！」

ゲリアは、後に従っていた部下達に向け大声で言った。

「『土』系統の者は前に出よ！！」

そういうと、何人かのメイジたちが馬を下り、ゲリアたちの前に進み出た。

「『壁』を生成せよ！！」

メイジたちは呪文を詠唱し、地面に向け杖を振り下ろした。

次の瞬間、彼らの前の砂が盛り上がり、彼らの姿を完全に隠せるほどの高さにまで成長していった。そしてその後『鍊金』によってその砂の壁を硬化させた。

「ゲリア殿、これは？」

キーンは目を丸くしてゲリアに尋ねる。

「見ての通り、我らの身を守るためですよ、報告によればあの遺跡にいる者たちは皆が銃で武装していると云うではありませんか、常に『エアシールド』を唱えているわけにはならんでしょ？」

「ふむ、たしかに・・・」

キーンは形成された壁を軽く叩いてみた。どうやら銃弾くらいは防げそうだ。

「なんだありや？奴ら何をしやがったんだ？砂を盛り上げて壁を作りやがったぞ！？それも手も使わずに！？」

英兵たちはあっけに取られていた。

「あいつら魔法使いかよ！？」

さすがのトニーも驚いたように前方の集団を見つめていた。

「かもしれない・・・」

ジヨナサンはそう言うのと立てかけたステン短機関銃を取り、ベルトを肩にかけた。

「中尉、奴らは一体何者なんですか！？ベドウィンにもナチ野郎にも見えない！！」

エヴァンズがジヨナサンに尋ねる。

「わからんが油断はするな、連中が何をしてくるか判らん」
そのときだった。不意に何かがジヨナサンの頭上をかすめた。

「なんだ！？」

あわてて物陰に身を隠す。

「狙撃してきたのか！？」

「銃で撃ったんじゃない！一体何を！？」

そのとき、火の玉のようなものがいくつも彼らに向け飛んできた。
「うわ！！」

火の玉は次々に遺跡の壁に当たり、破裂した。

「一体何なんだよ！？」

「みんな伏せてろ！！」

しばらくして火の玉は飛んでこなくなった。

「止んだか？」

ジェシーは恐る恐る物陰から頭を出して、様子を伺った。

「畜生！あいつら何者なんだよ！？」

「キーン殿！？一体何をしている！？」

ゲリアは驚愕した。キーンの部下達が遺跡に杖を向けていたのだ。

「反応は？」

キーンが部下に尋ねる。

「あつたようです！！連中はおびえてます！！」

ゲリアがキーンに詰め寄った。

「キーン殿！！これは一体なんのマネかね！？」

「彼らにちよつとした挨拶をして差し上げただけですよ、ゲリア殿」

「いきなり彼らを攻撃するとは、いったい何を考えておいでだ！？」

「ゲリア殿、先に仕掛けてきたのは彼らの方なのですぞ？一度くらいお返しをせねば気がすみますまい・・・」

「しかし、もう一度彼らに接触を試みるべきではないのだろうか？」

「ゲリア殿、報告によれば彼らにわれらの言葉が通じぬそうではありませんか、そんな状況で交渉など出来るとお考えですか？」

確かに彼の言うとおり、言葉が通じない以上は交渉は不可能である。

「く・・・、確かに貴殿の言うとおりですな・・・」

ゲリアは悔しそうにそう言った。

エヴァンズは小銃に銃剣を取り付けると、向こうにいる謎の騎士団たちへ銃口を向けた。

ジヨナサンはステン短機関銃に弾倉を差し込むと、周りの部下達に向けて叫んだ。

「奴らは本気だ！！もう一切遠慮はせずに撃て！！ただし無駄撃ちはするなよ！！よく狙うんだ！！」

「くそ！結局こんなことになるのか・・・」

ベンは嘆くようにそう言った。

「ベン、もうあきらめろ！殺らなきゃ殺られるんだぞ！？」

「くそう！！こんなことになるなんて僕らは本当についてないよ！！」

ベンも慣れない手つきで弾を弾倉に押し込んだ。

「さて、これからどうするものかな？」

壁から遺跡の方を覗きながらゲリアは考えていた。

「できれば無意味な争いは避けたい、しかし彼らと話し合うのは不可能、いったいどうすれば・・・」

そのとき、彼の背後から声がした。

「ゲリア殿、我々にお任せください」

そう言ったのはレー又修道会騎士団に所属するクローナという若い男であった。

「クローナ殿、いったい何をするつもりなのだ？」

「我々が、神聖なるテーレ神殿を穢した異端者どもを成敗してまいります！！」

「たった8人でか！？」

ゲリアは呆れたようにクローナの部下の方を見た。この密偵団に参加しているレー又修道会騎士団は8人だけであったのだ。

「8人で十分です、閣下。所詮奴らは平民どもの集まりなのでしょう？恐れるに足りませぬ！！」

「しかし、彼らは銃を持っているのだぞ？」

「銃の弾なんぞ、『エアシールド』を唱えればどうと言うことはありませんよ！！閣下！！」

クローナは自信ありげにそう言った。

「そんな保障はあるのか！？」

「我々だけで全ては片付きます！！閣下はそこでゆっくりとご覧になってください！！」

そういうとクローナは8人の部下と共に馬で駆け出していった。

「バカめが！！先を急ぎおって！！」

その後姿を見届けながら、ゲリアは吐き捨てるように言った。

英兵たちにも数人の騎士がこちらに向かってくるのが見えた。手に

は杖か槍のようなものを持っていた。その先が不気味に光り輝いている。

「奴ら、向かってくる気です!!」

「あいつら自殺志願者か!？」

トニーは呆れたように向かってくる八騎の騎士を見た。

「どうします、中尉？」

エヴァンズはジョナサンに尋ねる。ジョナサンはニールソンに言った。

「ニールソン、先頭のやつを狙え！」

「わかりました、やってみます」

ニールソンは小銃を構えると、先頭を突っ走る騎士に狙いを定めた。

「ニールソン、外すなよ！」

遺跡に8騎の騎士がどんどん近づいていく。先頭を走るクローナは遺跡にいる集団を睨んだ。

「異端者どもめ!! 始祖に代わって裁きを受けさせてやる!!」

クローナは持った杖を、遺跡を占拠する集団の方へ向けた。杖の先端が赤く輝いている。

「平民風情が、我らに楯突くなど千年早いわ!!」

神殿を占拠している者たちの顔が見えてきた。殆どが怯えたような顔をしている。一人だけこちらに銃を向けていたが、無駄な足掻きだろう。所詮は平民だ、とクローナは思った。

「我らの炎で燃やし尽くしてくれよう!!」

そう言っ杖を振り上げた。

だが次の瞬間、何かが自分の胸を貫くのを感じた。それと同時に体中の力が抜けていく。

「?」

自分の胸元を見ると、小さな穴が開いていた。そこから絶え間なく血が流れ出ている。それを見たクローナは自分が撃たれたというこ

とようやく気づいた。

「ばか・・・な、エアシールドは・・・完璧な・・・はずだ・・・」
それだけ言っとクローナは馬から転げ落ちた。

「よっしゃあ！！やったなニールソン！！ついに一人殺ったぞ！！」
物陰から様子を伺っていたトニーは歓喜の声を上げた。

「トニー！！わかってるのか！？これであいつらを完全に怒らせた
かもしれないんだぞ！！？」

ベンが呆れたように言った。

「それがどうしたってんだ？何人来ようがぶっ殺すまでだ！！」

「まったく、どうしてこいつはこいつも好戦的なんだよ！！？」

ゲリアは土の壁の影から、胸を撃ちぬかれたクローナが馬から落ち
るのを見ていた。

「馬鹿な！！エアシールドは唱えたはずではなかったのか！？」

彼が驚くのも無理はない。エンフィールドNO4小銃の・303ブ
リティツシュ弾は、ハルケギニアで一般的な火縄銃やマスケット銃
の弾丸とは比較にならないほどの初速で撃ち出される。その威力は
『エアシールド』で防げる限度を軽く超えていたのだ。

クローナが撃ち殺されたのを見た彼の部下はみな血相を変え、馬を
振り向かせると、一目散に逃げ戻ってくる。その様子を見たキーン
は吐き捨てるようにつぶやいた。

「腰抜けどもめ！！」

命からがら戻ってくるクローナの部下に向け、野次が飛ぶ。だが、
ゲリアだけは砂漠に転がったクローナの屍を寂しそうな目で見つめ
ていた。

「クローナ、哀れな奴よ、まだ若かったのに、先を急いだばかりに・
・・・」

メイジたちにとって、平民によって武器、特に銃で殺されることは最大の恥であるのだ。

「ゲリア殿、それだけクローナが青二才であっただけの話ですよ、まあ心配しなくとも今頃彼の魂は始祖の下に召されているはずですよ。」

そういつてキーンはゲリアの肩を叩く。

「一体彼らは何者で、どこからやってきたというのだ？」

「これは、もっとよく作戦を練る必要がありますな・・・、しばらくここに留まるとしましょうか・・・。」

密偵団はそこに陣を張ることにした。

襲撃

ジョナサンとエヴァンズ、そしてアルバートは神殿の床いっぱい
広げられた武器、弾薬類の前にいた。

アルバートが二人に説明する。

「弾薬は全部を均等に分ければ一人当たり80クリップにはなり
ます。つまり一人400発は持てるということです」

「最後に補給を受けた後で一度も戦闘を経験していなかったからな
・・・とにかく弾薬に余裕があつてよかった・・・」

「しかし中尉、一度に全てを配つたら無駄撃ちをする奴が必ず現れ
ますよ？」

エヴァンズがジョナサンにそう言った。

「わかつている、だから一度に配るのは10クリップまでにしてお
こう、つまり一人当たり50発の計算だ・・・」

「しかし、それだけで大丈夫ですかね？」

「弾薬はとにかく節約しなくてはならない。補給が望めない以上、
弾が尽きたらすべて終わりだ、アルバート、他にあるものは？」

「他は手榴弾が40個、それと小銃擲弾が20発ほどあります。発
射機は三つありますが、一つは接合部が破損して使いものになりま
せん。」

小銃擲弾とは、小銃の銃口に筒状の発射装置を取り付け、そこに榴
弾をはめ込んで、空包の発射ガスによつて遠くに飛ばすための武器
である。これを使えば手で投げるよりもはるかに遠くへ榴弾を飛ば
すことが出来るのだ。第二次世界大戦ごろまでは広く使われていた
のだが、これを装着している間は実弾を用いることが出来ず、さら
に榴弾の発射の際には銃身に大きな圧力がかかるため、銃身が変形
してしまい精密射撃に使えなくなる危険性がある。突撃銃が主流と
なった現在では銃身下に榴弾の発射装置を付けるようになったため、
殆ど使われなくなっている。

「それは助かるな・・・」

「しかし中尉、連中が超能力者か魔道士かはわかりませんが、今日の奴らの攻撃方法を見た限りではそれほどの脅威には見えませんよ？」

「だが油断は禁物だ、もし連中が昼間起こした現象が本当に魔法だとしたらだ、今度はどのようなモノをだしてくるかはわからない」

「・・・」
「とにかく、今夜中に配置を決めておくことにしよう・・・、奴らも朝になったら再び向かってくるはずだ・・・」

その頃、遺跡から200メートル離れたロマリア密偵団の陣の天幕の中でキーンたち将兵は臨時に会議を開いていた。

「連中の持つ銃がエアシールドを貫くほどの力を持っているということだけはわかりました。問題はそれをどう切り抜けるかです」

「『土』系統の者達にゴーレムを作らせましょう、それを盾にしながら進めば神殿にたどり着けるはずですよ」

「単純すぎるが、それしかないだろう・・・、後は何人かの兵士達に錬金で盾を作ることにしよう・・・」

ゲリアはキーンに向かって言った。

「キーン殿、申し訳ないのだが、今回私の部下をこの作戦に参加せるわけにはいかない、あのクローナをいとも簡単に殺した者たちだ、そう容易くねじ伏せられるような者たちではないだろう・・・」

「ゲリア殿、まさか怖気づいたのではないのですかな？」

「今日、彼らはクローナの部下を見逃した、やろうと思えば皆殺しに出来たはずだ！だが彼らはそんなことをしようとはしなかった。彼らにはそんなことが出来るほどの余裕があるのかもしれない、だがこれ以上進めば彼らも容赦しなくなるだろう、私にも20人の部下の命を預かる責任があるのだ。こんな無謀な作戦のために部下を失うわけにはいかない」

「ではここでゆっくり見ていれば良いこと、あなたの前で異端者どもを成敗して差し上げますよ」

四日目の朝、見張りに立っていたニールソンが大声で叫んだ。

「敵襲来！！！」

全員が小銃を持って配置に着く。

「いよいよきやがったな！？」

トニーは昨日敵が生み出した砂の壁のほうを睨み付けた。壁の隙間から人が現れた。いや人に似た何かであった。

「何だあれは？」

「砂が・・・、歩いているだど？」

それは『土』系統のメイジたちが生み出したゴーレムであった。ゴーレムとは土の魔法で作られた意志を持たない人形である。様々な作業や戦闘に用いられていて、通常は30メートルほどの大きさがある。しかし地面が砂ということもあり、あまり大きなものを作り出すことは出来なかったようで、大きくても5メートルほどのものであった。しかしそれでも生身の人間に太刀打ちできるようなものではない。

「気味悪いもんばっかり出してきやがって！！」

ゴーレムの背後から何かが飛んでくる。それは遺跡の壁にぶち当たり、砕け散った。ベンはその破片を拾ってみた。

「氷？」

そのとき先ほどと同じような氷の破片がものすごいスピードで彼の顔を掠めた。彼の頬から血が滴り落ちる。

「まずいぞ！あんなもん食らったら・・・」

「昨日の火の玉に続いて今度はこれか、やつらはやっぱり魔法使いなのかよ！？」

「発砲を許可する！！撃て！！」

ジヨナサンが大声で叫ぶと同時に、イギリス兵たちは一斉に小銃を

撃ち出した。

弾丸はゴーレムたちに当たり、その頭や腕を吹き飛ばしていく。しかし、吹き飛ばされたその瞬間から新しい頭や腕が生えてくるのだ。後ろにいるメイジたちに弾は届いていないようである。

「くそう！！あの砂人間がジャマして弾が届かないのか！！」

「後ろの奴が姿を見せるのを待つしかねえ！！」

トニーは小銃を構えなおした。ゴーレムの影からロマリア兵がこちらの様子をうかがおうと顔を出してきた。

「くたばれクソ野郎！！」

トニーが引き金を引いた瞬間、そのロマリア兵は頭から血を噴出しながら倒れた。それを見た後続のロマリア兵が怖気づいたようにゴーレムから離れ、陣へと逃げ戻ろうとした。

「銃を持った敵に姿をさらすのかよ、オイ！？」

トニーはそのロマリア兵の背中を撃ちぬいた。

「くそ！奴らどんどん近づいてくるぞ！！」

ベン是小銃を抱えたまま固まっていた。

「くそ・・・」

「ベン、躊躇うなど言ってるだろ！！死にたいのか！？」

トニーが怒鳴った。

「無理だよ、僕にはどうしても出来ない！人を撃つなんて無理だ！！」

「殺らなきゃ殺られるんだ！！いい加減気づけよ！！」

そのとき、一人のロマリア兵の放った氷の矢が、英兵一人の首に突き刺さった。それを見たジェシーが大声で叫んだ。

「ベン！！早く来てくれ！！」

ベンが賭けより彼の様子を見たが、首を振った。

「だめだよ・・・、死んだ・・・」

「そんな・・・」

「くそう！！」

ベンは悔しそうに地面に拳をたたきつけた。だが、敵は悲しむ時間

を与えてくれなかった。

「今は悲しんでる場合じゃない！！やつらを食い止めるんだ！！」
向かってくる敵へ短機関銃を撃ちながらジョナサンは叫んだ。

「ぬう！！迂闊に姿を晒すわけにはいかな．．．」

遺跡に接近するロマリア兵はゴーレムの背後から様子をうかがった。彼等の常識で言ったら、銃という武器は短距離でしか当たらず、一発一発を撃つのにかなり時間がかかるものであった。しかし、目の前にいる集団の持つている銃はそんな常識から遙かにかけ離れていた。遠くからでも正確に目標を撃ちぬき、かつ次弾の発射に2〜3秒とかわからない、一体なんだというのか。
生まれて初めて、彼は平民相手に寒気を感じた。

ジョナサンはステン短機関銃で、近づくゴーレムたちを掃射していたが、あつという間に弾が尽きてしまった。

「くそ！弾切れか！！」

手持ちの弾倉も無くなったので、弾薬箱が置いてある神殿の中に向かおうとして振り向き、そこで彼は止まった。彼の目の前に、先に弾を補充していたトニーが、彼に小銃を向け立っていたのだ。

「トニー？」

ジョナサンは一瞬、なにが起こったのか理解できなかった。

トニーは引き金を引いた。

しかし彼の目はジョナサンに向いていたのではなかった。

ジョナサンが後ろを向いた瞬間、彼の後ろにいたロマリア兵が胸を押さえて倒れた。いつの間にか近くまで来ていたのだ。

「トニー、すまない！！」

「まだ来ますぜ！」

砂のゴーレムを盾にしながら5人のロマリア兵がこちらに近づいてくる。

「トニーー！！やつらを吹っ飛ばせ！！」

ジェシーが叫んだ。

トニーは小銃擲弾の発射装置を取り付けた。

「ヤロー！！見てろよ！！」

小銃の薬室から実弾を取り除き、代わりに空包を薬室に装填する。そして発射装置に榴弾を差し込んだ。銃尾を地面にしっかり固定する。

「まとめて地獄に落ちやがれ、クソ野郎が！！」

トニーが引き金を引いたと同時に、先端部に取り付けられた榴弾が勢いよく飛び出した。それは放物線を描きながら、ゴーレムの後ろにいるロマリア兵たちに向かって飛んでいった。榴弾が彼らの目の前に落ちた瞬間、それは炸裂した。爆風によってゴーレムもろとも、ロマリア兵たちは吹っ飛ばされる。

「やったぞ！！」

ジェシーが歓喜の声を上げる。

「もう一発！！」

トニーは2発目の榴弾を差し込んだ。

「トニーー！！もつと奥を狙え！！」

ジョナサンがトニーに叫ぶ。

「奴らの司令部を潰すんだ！！早く！！」

トニーは榴弾が200m以上飛ぶよう、小銃を傾けた。

「俺からプレゼントだ！！サイコーにいいモノだぜ！！しっかり受け取れよ！！」

そついうと、トニーは引き金を引いた。

「たかが15〜6人の平民、どうして殲滅させることが出来るんだ！？」

天幕の中でキーンは部下に怒鳴り散らしていた。怯えた部下が答える。

「神殿のものたちが銃で応戦してきます・・・」

「バカ者めが！！たかが銃ごときにわれら貴族が怖気づくとは、何たる恥さらしだ！！」

「それが・・・、奴らの持つ銃は威力が高く連射も出来るため、迂闊に近づくことが出来ないのです。」

「まったくいつもこいつも腰抜けばかりだ！！貴族の誇りというものがないのか！？貴様ら！！！」

キーンが大声で怒鳴りつけた、そのときだった。

天幕の外で爆発音がした

「なんだ！？何がどうした！？」

あわてて外に飛び出したキーンは驚くべき光景を目にした。

彼の目の前には、傷ついたロマリア兵たちがうめき声を上げながら転げまわっていた。その中心部には何かが炸裂した跡があった。

幸い死者は出なかったようだが、それでも回りにいる兵士達の士気を下げるのには十分だった。

「平民が・・・、火の力を操ったと！？奴らは・・・、一体何者なのだ！？」

ゲリアがキーンに声をかけた。

「彼らを侮りすぎていたようだな、キーン殿」

「フン！！平民が火の力を使うなどありえん！！どうせエルフの技を真似ただけだろう！！ますます気に入らんわ！！始祖に代わって必ず聖地を穢した奴らに裁きを下してやる！！」

キーンは周りにいる部下達にむけ大声で叫んだ。

「ペガサスの飛行許可を出す！！突入する者には連金で盾を作れ！！出来る限り厚めにだ！！なんとしても奴らを八つ裂きにしろ！！」

「連中も馬鹿みたいに突っ込んでこなくなつたぞ！！」

ジェシーが歓喜の声を上げた。

「おい、上を見る」

トニーが指差す方向を見ると、昨日見たペガサスが3頭、こちらに向かつて飛んできた。

イギリス兵たちはそのペガサスに向け発砲するがなかなか当たらない。

ペガサスが遺跡の真上まで来た時、3人のロマリア兵が飛び降りてきた。

「くそ！やつら入り込んできやがった！！中から崩す気だ！！」

「トニー！！ベン！！アルバート！！後ろを頼む！！」

ジヨナサンが叫んだ。

「言われなくてもやりますよ！！」

トニーは小銃に銃剣を取り付けると、まだ固まったままのベンを立たせた。

「いくぞベン！！」

三人は遺跡の奥まで進んでいった。

「野郎、どこに潜んでやがる」

トニーは小銃を構えたままゆっくりと遺跡の内部を進んでいった。ベンも恐る恐る後に続く。

「どこにいるんだよ・・・」

その時、一人のロマリア兵がベンの目の前の柱から飛び出した。そのロマリア兵はベンに杖を向けていた。咄嗟にベンもそのロマリア兵に銃を向けた。それを見たトニーが叫んだ。

「ベン！！殺せ！！」

しかし彼は撃つのをためらった。

「く・・・くそ！」

ベンが撃てないことを知ったロマリア兵はにやりと笑った。そして呪文を詠唱し始めた。杖の先が青白く光り始める。

だが、ロマリア兵が氷の矢を放とうとした瞬間、背後からトニーが

銃床でそのロマリア兵を殴りつけた。倒れたロマリア兵の顔面に何
度も銃床で殴りつける。辺りに肉片が飛び散った。

「ベン！！ためらうな！！死にたいのか！！？」

「トニー・・・」

「俺はお前の面倒まで見てる余裕はねえんだよ！！死にたくなきや
撃つんだ！！わかったか！！？」

「あ、ああ・・・、トニー！！後ろだ！！」

トニーの背後にはロマリア兵が立っていた。

「ヤロー！！」

トニーは小銃を向け引き金を引いたが弾丸は出なかった。あわてて
いたので装填するのを忘れていたのだ。だが、もう弾を装填する余
裕はない。

ロマリア兵が杖の先をトニーに向け、なにか訳のわからないことを
呟く。

「畜生！！」

咄嗟にトニーは頭を下げた。それと同時に、彼の頭上を鋭い氷の槍
が勢いよく通り過ぎていく。

『ジャベリン』を眼前でかわされたことにロマリア兵は驚愕した。

しかし、そのことが彼にとって命取りになった。

「うおおおおああああ！！！！」

トニーが小銃の銃剣を彼の腹に突き刺した。そのまま遺跡の壁まで
押していく。

「くたばれ！！このクソツタレが！！」

ロマリア兵はうめき声を上げながら必死に銃剣を抜こうとするが、
トニーは腹につきたてた銃剣をねじって傷口を広げていった。傷口
から絶え間なく血が流れ出す。

「うごああああ！！！！」

「死ねエ！！！！」

腹を刺されたロマリア兵はしばらくの間もがいていたが、やがて動
かなくなった。

銃剣を抜くと、ロマリア兵は力なくその場に倒れる。

「はあ、はあ・・・あぶねえところだったな・・・」

彼が一息ついたそのときだった。

「トニー！！！！」

ベンが叫ぶと同時に、横からもう一人のロマリア兵が杖を振り上げて襲い掛かってきた。その杖は青白い光を放っている。

「畜生！！」

とつさに、彼は小銃でそれを受け止めようとした。しかし、銃を持った右手の指に杖が触れる。

「しまった！！」

次の瞬間、右手に激痛が走り、トニーは思わず小銃を落とした。

「トニー！！」

ベンがトニーを切りつけたロマリア兵に小銃を向けた。ベンに気づいたロマリア兵は光り輝く杖を振り上げてベンに向かっていった。

「く・・・くそおおおお！！！！」

ベンは思わず引き金を引いた。次の瞬間、ロマリア兵が胸を押さえ倒れた。

「・・・」

トニーは血に染まった右手を押さえながらベンの方を向いて言った。

「よくやれたな、ベン、それでいいんだ・・・」

「トニー・・・」

「くそ！もうここまでか！一旦撤収しろ！！」

ロマリア将校がそう叫ぶ

「撤退は命令違反ですよ！？」

「ここで無駄死にしたいというのか？これ以上無駄に犠牲を払うわけにはいかん！！この件に関する責任は私が取る！！退け！！」

彼等の盾となっているゴーレムが後ずさりを始めた。

「ぬう！！なぜ引くのだ！！進まんか！！」

キーンは撤退してくる自身の部下に向け叫ぶ。

「臆病者には始祖に代わって裁きを下すぞ！！」

キーンは自分の杖を抜こうとした。しかし、ゲリアが彼の腕をつかんだ。

「キーン殿、やめるのです！！大目に見てやりなされ！！この状況では仕方がないことだ！！」

「皆私の部下だ！！私の命令に従うのが当然のこと！！」

「彼らが無駄死にさせる気ですか！？これ以上続けても死者ばかりが増えるだけですぞ！！？」

「ぬう・・・」

「奴らが撤退していくぞ！！」

見ると、こちらに向かっていたゴーレムたちが砂の壁のほうへ戻っているところであつた。それに向かって英兵たちが小銃を撃ったが、ジヨナサンが止めた。

「やめろ！無駄に弾丸を使うな！！」

ジヨナサンは遺跡の方を向いた。アルバートが中から出てきた。

「中尉！！中に入った奴は全員片付いたようです！！しかしトニーが負傷しました！！」

「なんだって！？」

あわててジヨナサンは遺跡の中に走っていった。

「トニーは？」

トニーは右手をじつと押さえてうずくまっていた。

「トニー！！」

あわててジヨナサンはトニーのもとへ駆け寄る。

「大丈夫か！？トニー・・・」

ジヨナサンはトニーの足元を見て啞然とした。そこにはトニーのも

のであつた指が四本落ちていたからだ。

「なんてことだ・・・」

トニーは手を押さえながら、自分を切りつけたロマリア兵の屍を睨みつけていた。

「ヤロー、よくも・・・!!」

ベンはトニーの腕に包帯を巻きつけた。

「畜生め・・・」

「・・・」

ベンは黙って包帯を巻き続けた。

「ちよつと油断したばかりに、このザマだ、畜生・・・」

ジョナサンは一旦トニーのそばを離れることにした。ベンも巻き終えるとその場を立ち去った。

その日の戦闘で、イギリス軍は2名の死者を出した。死んだ者は各人の装備と共に埋葬することにした。

埋葬がすんだ後、エヴァンズはジョナサンに尋ねた。

「中尉、トニーは・・・、やつはどうなんです？」

ジョナサンはトニーの方を見た。彼は指の欠けた右手で必死に小銃のボルトを動かそうとしていた。しかし、どう頑張ってもボルトを動かすことは出来なかった。

「深刻だ・・・」

ジョナサンはトニーの方に近づいていった。

「トニー」

トニーはジョナサンの方を向かずに返事をした。

「中尉、何のようですか？」

「お前に言いたいことがある。まず、今日私の命を救ってくれたことを感謝したい、それとベンのことだ・・・、お前がいなければ私もベンも死んでいた。」

「そいつはよかった、だが中尉、もうだれも助けることは出来ませんぜ、このザマじゃあね・・・」

そう言つてトニーは親指しか残っていない右手を見せた。

「トニー、辛いのは・・・」

わかる、と言おうとするのをやめた。『辛いのはわかる』という言葉は、本当は当事者の気持ちをもったく分かつていない人間が口にするものだ。部外者が安易にそれを口にするのはかえって当事者を傷つけかねないのだ。

「いや・・・我々他人がそんなことを口にする権利はないだろうな、お前の辛さはお前にしかわからないだろう・・・」

「そうだ、誰にもわかりやしませんよ！これじゃあ、もう小銃は持てねえ！！」

トニーは吐き捨てるように言った。

「そうだな、片手じゃ小銃は使えない・・・」

「俺は入隊して4年間、来る日も来る日も、誰よりも強くなるために努力してきた！！だがそんな努力も今日の一瞬でパーだ！！もう俺は役立たずだ！！何も出来ねえくそつたれだ！！畜生！！」

トニーは俯き、嗚咽を漏らした。

「ちくしょう・・・、こんなところにさえ来なければ・・・畜生・・・」

「トニー、私はまだ、お前が役立たずになつたとは思っていない」

ジョナサンはホルスターから自分の拳銃を抜くとトニーに放つた。

「中尉？」

「確かにお前は指を失くした、だが、お前にはまだ左手が残っている」

「・・・」

「だから今できることをしろ、お前はまだ戦える、それはやるよ」

「中尉・・・」

「トニー、私はお前のことを・・・、小隊一のトラブルメーカーだと思つていた。一時期は・・・、上にお前の転属願いも出そうかと

思った、本当の話だ。それだけ疎ましく思ったこともあったよ。だが今日お前の行動を見て、お前は他の者に負けないほど仲間思いのいい奴だと改めて判った。いまでは、全て私の誤解だったんだと思う……。どうかお前を誤解していた私を許してほしい……。本当にすまなかった……。」

そう言うと、ジョナサンは踵を返して遺跡の方に戻ろうとした。そんな彼にトニーは声をかけた。

「中尉、あの……。一言よろしいですか？」

「なんだ？」

「中尉……。詫びなければならぬのは俺のほうです！中尉がこんな状況でもしっかり小隊をまとめようと必死になっていたのに、俺はそんなことをまったく考えずに勝手な行動をとり中尉ばかりでなく、小隊全体に迷惑をかけました。しかし中尉、もう二度と迷惑はかけません！！」

そう言うとトニーは深く頭を下げた。

「そうだな、今度はバカなマネはするんじゃないぞ、いいな？」

笑いながらそう言うと、ジョナサンは遺跡の中に戻っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4468f/>

M I A

2011年1月22日03時22分発行